

第3分科会（学校農場運営）

【テーマ】生徒の実践的・体験的な学習活動を推進するための農場運営はどうあるべきか。

岩手県立大船渡東高等学校指導教諭 谷地 禎彦

1 はじめに

本校は、大正9年に岩手県気仙農学校として創立された大船渡農業高等学校が前身である。岩手県沿岸南部に位置し、創立以来地域の農業教育の役割を担ってきた。平成20年4月に、大船渡工業高等学校、高田高等学校情報処理科、広田水産高等学校家政科と統合を行い、県南唯一の「総合的な専門高校」として開校し、今年創立10周年を迎えた。農芸科学科、機械科、電気電子科、情報処理科、食物文化科の5学科で組織され、それぞれの専門教育は勿論、学科間を横断的に学べるカリキュラム編成をし、「地域産業の担い手として貢献できるグローバルな人材育成」を目指し実践を行っている。

2 農場の概況

学校農場は、本校舎より3km離れた前大船渡農業の農場をそのまま活用しており、農場実習の際は、復興支援で寄贈されたスクールバスで移動を行っている。野菜、草花、造園、食品製造の4部門で構成、作物部門は、震災の影響で休耕田となり収入はない。施設は何れも老朽化しており、ロックウール温室でトマト、礫耕温室でキュウリ栽培を行い、本校の特色である椿の苗木栽培も行っている。部門配置は、教諭1+実習教諭1を基本として跨がった配置はない。

3 研究協議の視点

【視点1】学校の特色を生かした魅力ある学校農場のあり方について

学校農場は、教育課程に基づいた学習の実践の場であり、知識や技能、技術などを確実に身につけさせるとともに、生徒が主体的に取り組める環境を整えることを目指し、農場で行っている事例を紹介する。

（事例①）「スプリング・フェスタでの販売実習」

＜概要＞毎年5月第2土曜日に春の花壇苗や野菜苗、加工品の販売を行い、対面販売を通して表現力や実践力を試す取り組みを行う。

＜成果＞元気な挨拶、礼儀の醸成が図られる。対面販売でコミュニケーション能力の育成、会計処理で金銭の管理、責任感が感じられる。

（事例②）「保育園児とのサツマイモ交流」

＜概要＞保育園児との交流は、言葉遣いに気をつけながら和やかに、また生徒の主体性を重んじ教師は見守りを行う。

＜成果＞最初は初対面で緊張してなかなか話が出来なかった生徒も、時間が経つにつれ交流が活発になり、実践力が身につく。

＜課題＞事前指導を実施するが要領を得ない生徒も一部いる。

（事例③）「気仙光陵支援学校との椿のさし木交流」

＜概要＞椿交流会を通して友情の輪を育む学習を行う。生徒が先生役、椿の挿し木体験やパンジーの鉢上げの仕方を昨年度からタブレットを用いて実施する。

＜成果＞生徒の手作り紙芝居で説明を行っていたが、支援学校の生徒には視覚的効果があった。

操作手順が画面で見られるので、前後の画面操作もスムーズにでき効果的であった。同級生がいたりして緊張なく主体的に交流ができている。タブレットは、誰でも使いこなせて効率的であった。

＜課題＞効率的に ICT 活用をしたいが、タブレット機器不足のため私物を使用している。

（事例④）「椿の学校としての地域貢献」

＜概要＞昭和 42 年から導入したツバキ・サザンカに関する研究を引継ぎ、地域と連携し、地域発展の一助として取り組む。市の「つばきっ子誕生お祝い事業」に苗木を提供。また、県指定の天然記念物「三面椿」復活プロジェクトや椿油採油産地化プロジェクトへの協力、植樹活動など産官学連携にも取り組む。さらに、「世界の椿館・基石」での椿祭りで洋種椿苗木販売を行い、3 年前からは椿材による燻鶏や茎ワカメ、ホタテ、かきの燻製の振る舞いを行い学習活動に生かす。

＜成果＞普段の実習をおろそかに出来ないという雰囲気になり、良い物を提供したいと思うようになった。外部に出かけることで地域の方々から学ぶことが多い。

＜課題＞接客に対してマナー教育や椿に関する専門的知識の構築が必要である。

（事例⑤）「産学連携によるプロジェクト学習」

＜概要＞地域の食材・廃材を活用した取り組みとして、気仙川で捕れる落ち鮎を酔仙酒造から提供して頂いた酒粕につけ込み後、椿剪定枝で燻煙を行い、商品化を目指している。復興の証として椿の絨毯を目指すレッドカーペットプロジェクト活動の取り組みは、現在まで 4 回実施、神奈川県の高校生とも交流植樹を行い県外に向けた活動にもなっており、「産学官民総参加型産業のモデルケース」として計画進行中である。

＜成果＞地域の食材を活用し、地域の産業と連携することで、地域産業の活性化の一端を学校が担うことで自己有用感の高まりが感じられる。また、企業と共同開発に向かう過程でコミュニケーション能力の向上及びキャリア教育に繋がっている。

＜課題＞コミュニケーション能力が低い生徒が多く、十分に機会を生かしきれていない。より専門的な知識や技術を習得することで、発言の機会を増やし、コミュニケーション能力やキャリア教育の効果を高めていく必要がある。

（事例⑥）「横断的学習における他学科生徒への農業教育について」

＜概要＞併置校ならではの相互の乗り入れ、横断的な学習が特色である。農芸科学科では、「生物活用」を開講し定員 20 名、2 時間継続で知識と技術をセットで学習できる配慮を行う。

＜成果＞他学科生との相違点は、農業に対するレディネスが不十分であり、所謂、農作業への取り組みには抵抗があるが、農業そのものに対する興味関心は高い。

＜課題＞単発学習、体験学習の意味合いが強い教科であるため授業の展開に工夫が必要である。毎回授業研究のような緊張感をもって望む必要があり教員の負担が大きい。雨天時の学習教材も常に用意しておく必要がありより計画性が求められる。

4 おわりに

本校の特色である横断的学習をすることで視野を広げることが出来、産学連携活動やプロジェクト研究などを通じて主体的に取り組める生徒の育成を行うことで、地域担い手として気仙地域の有為な人材の育成が図られる。そのためにも、学習活動を展開する学校農場が果たす役割は大きく、深い学びに向かう態度とコミュニケーション力を育むことが不可欠であると考えます。

第3分科会

「生徒の実践的・体験的な学習活動を推進するための農場運営はどうあるべきか」

山形県立庄内農業高等学校 教諭 笹原 俊 明

1 はじめに

本校は、山形県西部日本海側に位置する庄内平野のほぼ中心部、鶴岡市藤島地区にある。一面に水田が広がる日本でも有数の稲作地帯であり、高い品種改良技術によって「つや姫」「はえぬき」「雪若丸」などのブランド米を誕生させた農業総合研究センター水田農業試験場水稻部が近隣にあり、稲作教育については頗る恵まれた環境である。さらには、周りには北に鳥海山、南に月山をはじめとする山々と庄内浜など日本海にも面し、自然豊かな食材の宝庫地帯とも言える。鶴岡市は、2014年にユネスコ食文化創造都市に認定され、生きた文化財と称される「在来作物」が多いことから、古くから継承されてきた伝統料理も多く、しかも優れた生産者や世界的なシェフ・大学などの研究機関など優れた人材を有しており、それらと連携することにより、「農業教育」にはとても恵まれた環境といえる。

2 内 容

(1) 本校の概要

ア 学科構成

本校は、入学志願者減少による1学級減に伴い、平成29年度より新学科「食料生産科」「食品科学科」がスタートした。

イ 学科目標

「食料生産科」

食糧供給に関する基礎的・基本的な知識と技術を習得し、農業が果たす意義や役割を理解させるとともに、農業に関する課題を主体的に解決できる実践的な能力と態度を育て、地域の農業を支える食料生産のスペシャリストを育成する。

「食品科学科」

食品の加工及び流通に関する基礎的・基本的な知識と技術を習得し、食品加工が果たす役割を理解させるとともに、食に関する基礎的な課題を主体的に解決できる実践的な能力と態度を育て、加工や流通などを通して農業生産物をコーディネートし、地域産業に幅広く貢献できる人材を育成する

ウ 新学科後の生徒の人数（30年度7月現在）

平成29年度入学生 食料生産科28名 食品科学科19名

平成30年度入学生 食料生産科35名 食品科学科30名

（平成28年度入学生 生物生産科15名 園芸科学科11名 生物環境科32名）

エ 主な学習農場の規模

- ・作物（水田）477a ・果樹園36a ・草花（温室・ハウス）640㎡
- ・野菜（露地）17a（温室・ハウス）972㎡ ・畜産（牛1頭、豚1頭、鶏10羽、山羊1頭 ・食品加工室（総合加工・麺製造・乳飲料・その他） ・生物学実験室
- ・機械実習室 ・玉川農場（山林約580a（内圃場70a））

(2) 地域や関係機関と連携した教育環境の充実について <視点(3)>

ア 玉川農場を利用した地域交流農園の取り組み(庄内農業高等学校地域連携協議会事業)

(ア) 農・福連携地域交流農園整備事業(農福連携プロジェクト事業)

観光農園運営学習の一環として、鶴岡市羽黒町の庄内農業高校玉川農場を活用し、主に科目「グリーンライフ」選択者を対象に、地域福祉団体と連携して観光型交流農園を整備し、地域協働による花卉植栽体験、ブルーベリー、有機野菜の栽培収穫体験を行う。

また、生徒と地域の高齢者等が共に野菜栽培や草花の植栽をすることで、世代間交流により、地域住民との交流や高齢者の生き甲斐づくりの場として活用している。さらに、生徒への農作業技術の伝承や、収穫物の「子ども食堂」への提供や「孤立児童」の就業体験の場としての提供など、地域貢献ならびに地域まちづくりに資することを目的としている。

(イ) 連携している関係機関

- ・鶴岡市藤島庁舎総務企画課(地域連携協議会事務局)
- ・鶴岡市社会福祉協議会藤島福祉センター

(ウ) 授業設定 生物環境科3年選択科目「グリーンライフ」 8名

生物環境科3年科目「総合実習」(2年選択科目「有機農業」から継続) 11名

生物環境科3年課題研究(環境保全研究専攻班5名)

(エ) 主な今年度の取り組み(予定も含む)

- 第1回(5月) 農園計画づくりのワークショップ(オーガニック農法・観光交流農園づくり)
- 第2回(5月) 野菜苗の定植作業(なす・ピーマン・かぼちゃ・スイカ・ししとうなど)
マリーゴールドの混植(コンパニオンプランツ)、ヒマワリの播種
- 第3回(7月) 野菜苗の定植播種(ふだん草・ニンジン等)、野菜(なす・ピーマン)・ブルーベリーの収穫体験、畑の除草作業、コスモスの播種
- 第4回(8月) 野菜とブルーベリーの収穫体験、除草作業
- 第5回(9月) 野菜の播種作業(ダイコン)、ニンジンも同時播種(コンパニオンプランツ)
- 第6回(9月) 西洋芝の播種体験(育苗箱への播種)
- 第7回(10月) ダイコンの間引き・追肥作業、除草作業
- 第8回(11月) 学校祭(庄農祭の巨大絵作成)への参加、餅つき
- 第9回(11月) 野菜(ダイコン・ニンジン)の収穫体験

3 まとめ

庄内農業高等学校地域連携協議会発足から6年目を迎え、鶴岡市より支援を頂きながら様々な連携事業に取り組んできた。その中で「地域交流農園事業」の取り組みは3年目になるが、当初は鶴岡市社会福祉協議会藤島福祉センターからの呼びかけで、独居老人宅などの買い物困難市民に対する農業高校としての支援について相談であった。本校でも学級減や学科再編に伴い、農場の適正規模への縮小や余剰圃場の有効利用を検討していた時期ということもあり、地域の高齢者対象の農福連携プロジェクト「地域交流農園事業」を開始した。昨年度までは、校舎に隣接している土地を利用していたが、今年度より、校舎より9kmほど離れた遠隔地農場「玉川農場」を利用することし、福祉センターや鶴岡市健康福祉部の呼びかけで集まった高齢者の方々と生徒が交流しながら、農場運営に取り組んでいる。この事業を通して、生徒の取り組みに対する関心や意欲が高まり、社会性が培われ、事業意義に対する思考力や会話を通しての表現力が高揚していることは間違いない。

第3分科会（学校農場運営）質疑応答・グループ協議のまとめ

【テーマ】 「生徒の実践的・体験的な活動を推進するための農場運営はどうあるべきか」

発表者 岩手県立大船渡東高等学校 指導教諭 谷地禎彦
山形県立庄内農業高等学校 教諭 笹原俊明

<発表者への質疑応答>

（質疑） 青森県立弘前実業高等学校 田中満 先生

カリキュラムと農場の関係は密接だが老朽化していく施設設備を抱えながらいくつもある部門をどのように維持しているのか。また農場担当の先生も含めて担当の先生方の人数、変遷、対応の仕方について。

（回答） 岩手県立大船渡東高等学校 指導教諭 谷地貞彦 先生

教員5名、実習教員4名、農場専属の学校技術員1名で4つ部門を運営している。各専攻に教員が各1人と実習教員を1名配置し、部門を持っていない教員はフリーで忙しい部門を見つつ全部門の統括している。しかし生徒の人数が少ないため忙しいときには全職員、生徒で協力し生産を上げている。

部門の維持については実験実習を中心に行っており、生産規模は400万くらいで各専攻ごと100万程。野菜は苗販売やトマトを販売、草花は文化祭などでシクラメン等を販売し生産を上げている。それ以外は修繕費や備品講習など農場全体で考えながら運営をしている。

（回答） 山形県立庄内農業高等学校 教諭 笹原俊明 先生

現在学科改編をして2年目であり、職員が減っていく過程なので再任用を合わせて教諭が11名、実習教諭が7名だが、来年度は完成年度なので教諭が9名、実習教諭が6名になる予定である。部門としては稲作・機械・野菜・果樹・畜産・草花・生物工学があり、来年度の人数が減った状態でどのように維持していくかを考え、今年度の始めから基本的に一人2部門を担当しているが、主要部門があるため2つ目の部門が手薄になる傾向があるため計画的に農場規模の縮小を行い、現在は果樹を数本ずつ伐採している。稲作については昨年度から一部委託しており、これから更に農場維持のために部門構成を考えていく必要がある。新しい学科として食品科学科を立ち上げ、食品科学科の中でも選択科目で果樹や畜産、野菜などを選び農場実習ができるようにしている。1部では生産から加工までを担当し、今後は新しい学科も含め新体制に合う農場に改編していく必要がある。

＜グループ協議のまとめ（各班より各校での取組や状況など）＞

1 班 山形県立村山産業高等学校 後藤弥生 先生

まず地域との連携については、地域の方を学校に呼ぶ、もしくは学校から出向き出前授業を行っている。また、アンテナショップの運営を生徒たちにさせながら地域の方々との交流をしているという学校も多くあった。

学校の統廃合などで学級数減になっている学校も多くあるが、農場規模は従来のままであるという問題が出された。その農場規模をどのように運営していくかという話の中で、発表の中にもあった「学校設定科目」を学校ごとに配置して運営を行っていくという意見が出された。学科編成の影響によって必要科目の単位数の設定が難しくなり、いくつかのコースに対応できるような学校設定科目を配置している学校もあるようだ。

さらに、プロジェクト学習は大事であるが生産農場も持っているためそのバランスはどうあるべきかとの問題も出された。

2 班 福島県立修明高等学校 郷 貫 先生

農場長を中心に意見や内容を出していただいた。

単独農業高校や総合学科、実業高校など各学校の実情によって状況は大きく変わってくるが、第1グループの発表にもあったように、生徒数減や学級減になっても農場規模は変わらない学校がほとんどで、従来通りの規模の維持管理が大きな問題であり、さらに施設設備の老朽化も課題に挙がった。それをどうするかという話までは進まなかったが大きな意見としては農場の規模や施設設備の維持管理が何年も変わらないまま生徒数も教員数も減り大変になっている現状がある。

解決策としてどうしたらいいかはまとまらなかったが、学校で行っていることを外部に発信するためにPR活動は必要であり、農業高校なので普段やっていることがPR活動になるため大変ではあるが積極的に行事をこなしながら校外に発信していくことが必要であるという意見が出た。金足農業高校は様々な活動を取り入れており、それが生徒の興味関心につながっている。また学校として農業以外の魅力発信も重要であると考えられるため農場運営ではないが部活動や農業クラブ、学校行事など違う視点での学校活性化も必要なのではないかという意見が上げられた。

3 班 福島県立岩瀬農業高等学校 橋本昭次 先生

発表にもあったが、第3グループに集まった学校の中で実際にドローンを活用した農場運営に取り組んでいる学校はあるかという内容から入り、学科の講習会や業者とのコラボとして活

用している学校があるという状況だった。また農場の休耕地や学校林の管理が大変であるという意見があり、岩瀬農業高校では十数年前に県に返還した。また、きっかけがあり手放したという事例もあった。

それぞれの学校の悩みとして、最近農業高校に発達障害を持つ子供が多く入学してきている現状で、どのように農場運営や授業の指導をしているかという議題になり、支援が必要な生徒に対しては何度も繰り返し指導すると同時に、外部での販売会の時に計算ミスや対応に問題がないようにタブレットを活用し指導しているという取り組みが上げられた。

4 班 宮城県立加美農業高等学校 佐藤成悦 先生

各学校の取り組みとして農家に2泊3日のファームステイ、インターンシップ、震災復興事業として桜の苗木植栽プロジェクト、野菜・草花・加工品のセット販売、地域との交流など学校ごとに工夫して外部と連携を取りながら活動を行っている。今後、統廃合を控えている学校もあり、さらに学校の特色を生かした取り組みを考えていく必要があるという話合いになった。

座長より

それぞれ抱えている課題や問題を出していただき、農場運営のなかでは予算が絡む生産農場と研究農場というあり方や、地域との連携など、働き方改革とのバランスの中でどのように進めていけばよいかという課題も出てきている。

指導講評

宮城県教育庁高校教育課 主幹（指導主事） 伊藤 裕之

はじめに、本日発表いただきました先生方におかれましては、夏期休業中の御多用の中にも関わらず発表原稿及び資料等の準備にあたられ、あらためて感謝申し上げます。

第3分科会は、学校農場の運営の在り方について、3つの視点から各校より発表していただきました。本日発表していただいた内容はいずれも、農場を基点として生徒が主体となった教育実践の報告ということで、生徒が生き生きと学習活動や特色ある活動に取り組む様子が伝わって参りました。

山形県立庄内農業高等学校の笹原先生からは、年々減少する入学生により平成29年度からは1学級減となりましたが、地域や関係機関と連携した教育環境の充実について、実践例を紹介していただきました。

3年目を迎えた玉川農場を利用した農福連携プロジェクト事業では、地域福祉団体との連携を図り、観光型交流農園を整備し、栽培・収穫体験をとおして連携を一層強化するものでした。農業・農村における高齢化及び人口減少による担い手不足への対策が急務となっている一方で、障害者の就労機会等の環境改善も課題となっており、全国的にも農業と福祉の連携への関心が高まっており、時宜を得た取り組みとして評価できるものと思います。

また、ユネスコ食文化創造都市鶴岡市魅力体験事業では、地元の「在来作物」に着目し、外

内島きゅうり、ふじしま大根、庄内柿などの伝統野菜の栽培に向けて、産・官・学一体となった取り組みは地元の期待も高く、生徒にとっても「学びの種」となり、成果を挙げているものでした。

このことは、職業人として必要な豊かな人間性を育み、よりよい社会の構築を目指して自ら学ぶ態度の育成に大きく寄与するものであり、産業の振興や社会貢献に主体的かつ協働的に取り組む資質・能力の育成にもつながるものと考えます。今後も、教科の目標にもあります地域産業の発展を担う職業人を育てるという観点から、生徒のための農場づくりに取り組んでいただけたらと思います。

次に岩手県立大船渡東高等学校の谷地先生からは6つの事例から魅力ある農場運営について発表いただきました。特に、10年前の学科改編によって学科間の横断的な連携学習を実施しており、スプリングフェスタの販売実習では、その効果が発揮されておりました。

農業高校から総合的な専門高校として変遷により、専門性は薄れたように見えますが、一方で併置校ならではの相互学習は、お互いが連携するだけでなく、切磋琢磨することで専門教育の充実が図られていることが分かりました。

また、地域特産物の「椿」を利用した地域貢献及びプロジェクト学習では産学官の連携により地域産業の活性化の一端を担っており、期待の大きさが伺えました。そして、これらの活動が企業教育やキャリア教育の充実につながっているものと思います。

これらの学習活動は、新学習指導要領で提示されるカリキュラム・マネジメントにもつながることであり、地域の実態を適切に把握し、校内での教科等横断的な視点で課題解決に取り組み、伝統・文化を継承することは、今後の農業教育の発展に大きく寄与するものと考えます。

さて、今後の食農教育の普及や地域特産品のブランド化は年々盛んになってきており、これらの動向は今後さらに進展・拡大することが予想されます。2校から発表いただいた先進的な取り組みは、これまでの農業の在り方を大きく変える要因となると同時にこれからの農業の方向性を示唆し、農業の将来への期待を大きくする要因となり得るものと思います。

農業は、国民が生命を維持し健康に生き抜くための基幹産業です。これまで継承されてきた農業・農村の素晴らしい機能を保守しながら、競争力を持った新しい時代の農業をいかに構築するかが喫緊の課題であると思います。

それだけに、これからの農業教育が果たさなければならない使命と役割は極めて重要です。農業高校に学ぶ生徒たちは、自然との関わりの中で動植物を育てることを通して命の大切さを学び自身の生きる力を育んでいます。そのことを日常の学習活動のなかでしっかりと自覚させ、学習した知識・技術を実際に使える力に換える力を確実に身に付けさせると共に現場感覚のある教育を徹底していくことが何より肝要であろうと思います。そういった点については、今後も魅力ある農業教育の推進と農業のスペシャリストの育成には農業教育の教室である農場が必要不可欠です。

しかしながら一方では、生徒減少に伴う農場の規模適正について、検討する時期を迎えていると考えます。昨今、少子化の影響により高校に入学する生徒が減少する中、とりわけ農業高校においては、定員を確保するのが厳しい状況にあります。今後、統廃合が一層進むと推測されますが、農場については従来どおりの規模で運営している学校がほとんどです。そのために、職員はもとより生徒の負担も増えているのが現状ではないかと思います。実習が単なる作業に

ならないように、今一度検証し、実習指導と評価の一体化について確認して工夫・改善を図っていただくようお願いいたします。

そして、今後も特色ある農場づくりに向けて、地域や関係機関と更に連携を強化し、本研究協議会の主テーマにある「生徒の生きる力を育む活力ある農業教育の創造と実践」に取り組まれることを御期待いたします。

最後になりますが、発表者の先生方をはじめ、本分科会を運営していただきました福島県事務局の先生方に心から感謝申し上げます。以上で、私からの指導講評とさせていただきます。ありがとうございました。

秋田県教育庁高校教育課 指導主事 岸 弘昭

はじめに、発表いただいたお二人の先生方には、大変お忙しい中、発表資料等の作成に当たられたのではないかと思います、改めて感謝を申し上げます。また、分科会に参加の皆様には、長時間に渡って研究協議に取り組んでいただきました。お二人の先生方の発表から、各校・各県でもっている課題や悩みの解決に向けて、糸口になったのではないかと感じております。今日この会に御参会の先生方には、日頃より農業教育や農場運営の中心となり御尽力なさっているものと感じておりますが、農業教育のさらなる発展に向け、学校に戻りましたら、今日の分科会の内容を、必ず自校の職員に伝え、課題の解決に向けた情報共有の場を設けていただきますことをお願いします。

さて、第3分科会では、（学校農場運営）「生徒の実践的・体験的な学習活動を推進するための農場運営はどうあるべきか」というテーマで、実践事例をお話いただきましたが、農業高校における学校農場とは、各校の教育課程に基づいた農業教育の実践の場であり、知識や技術を確実に身に付けるため、生徒が主体的に取り組めるよう環境を整える必要があります。そして、近年では、6次産業化への取組もあり、学校生産物の販売所開設や地域の方々を招いての交流の場としてコミュニティ機能も果たしており、農業教育を進める大変重要な場となっております。そういったことを念頭に置きながら、お二人の先生方の発表や協議の中での質疑応答を聞いていると、生徒が生き生きとして学習活動に取り組んでいる様子が伝わって参りました。

一人目の岩手県立大船渡東高等学校の谷地先生からは、学校の特色を生かした魅力ある学校農場の在り方についてという視点で発表していただきました。事例として、6点紹介いただきましたが、各取組についてその成果と課題を明確化することで、次年度の取り組みが進化・発展している事が窺えます。特に目を引くのは、農場という教育資源から得られた生産物を媒体として、また、異世代との交流を通して生徒のコミュニケーション能力の育成が図られている点であります。

二人目の山形県立庄内農業高等学校の笹原先生からは、地域や関係諸機関と連携した教育環境の充実という視点で発表していただきました。その中で、庄内農業高等学校地域連携協議会事業として取り組まれている、農・福連携地域交流農園整備事業及びユネスコ食文化創造都市鶴岡市の魅力体験事業を紹介いただきました。両事業ともに、科目に位置づけし、学習活動と

して農場を活用した取組であることと、関係諸機関と密な連携を通して取り組まれています。特に目を引くのは、農・福連携地域交流農園整備事業において、世代間交流により、農場を地域住民との交流や高齢者の生き甲斐作りの場として活用している点と農作業技術の伝承や、収穫物の「子ども食堂」への提供や「孤立児童」の就業体験の場としての提供など、地域貢献並びに地域作りに資している点であります。笹原先生もお話になっておりましたが、農場を活用することにより、生徒の社会性が培われるとともに、事業の意義に対する思考力や会話を通して表現力が高まったという点において評価できると思います。

お二人の先生方の事例発表に共通していることは、農場という教育資源を活用し、地域交流や地域連携等を授業に組み入れるなどして、農業教科とキャリア教育の関連を図り、日常の学習に対してより関心・意欲をもたせることができている点であり、とても評価できる取組となっていたかと思えますし、この学校でしかできない特色ある教育活動であります。

この3月に新学習指導要領が公示されました。特にその中でも、職業教育に関する教科では、資質・能力を明確化するために、産業界で必要とされる資質・能力を見据え、各教科・科目の目標について、「知識及び技術」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱に沿って整理されました。農業教科や、それぞれの科目を学ぶことで「何を身に付けさせるのか」、つまり「何ができるようになるのか」が明確化され、「どのように学ぶ」の部分での授業改善が求められています。こういった視点で考えたときに、もう一度振り返っていただきたいことが2点あります。

一つ目 農場（農産物や加工品も含む）を活用したイベントは何のために行うのか？

言い方を変えれば、イベント等を通して、生徒にどのような力を身に付けさせるために行っているのか？各学校の教育目標や育てたい生徒像を基にした、教育課程の中で、各科目の年間指導計画に位置付された農場の活用であるのか？

二つ目 学校農場の果たす役割は大きく、冒頭でもお話ししたように、農業教育の実験・実習の実践の場であり、知識や技術を確実に身に付けるための場であります。農作業としての授業になっていないか？農場を活用した実験・実習を通して、どのような力を身に付けさせたいのかが明確になっているか？

以上、2点について、各校で再確認をお願いします。

最後になりますが、最近の農業高校において自営者養成的な要素は少なくなっていると思います。「農業を学ぶ」というよりも「農業に学ぶ」といった色合いが強くなってきているのではないのでしょうか。しかし、我々農業教員は衣食住を提供するための人材を育成しているということに誇りをもち、常に前向きな姿勢で、生徒の指導に当たって欲しいと思います。

大会テーマは「生徒の『生きる力』を育む活力ある農業教育の創造と実践」というテーマがありますが、『生きる力』つまりキャリア教育であると捉えれば、農業教育そのものが「キャリア教育」であると考えます。また、農業教育に携わる先生方一人ひとりがキャリア教育のロールモデルあり、今後も、そういった気持ちで生徒に向き合ってくださいと思います。

それぞれ各県・各校には諸課題が山積しているかと思いますが、チーム東北で情報の共有はもちろん、諸課題の解決に向けた人的ネットワークを最大限に活用し、次代の人材育成に努めていただければと思います。指導助言とします。